

123. 阪神・淡路大震災の被災地である芦屋市若宮町における復興評価に関する研究  
—被災前・被災直後・20年後の現在の日常のまちづくりに至る復興プロセスに着目して—  
A Study of Evaluation at the Wakamiya Town as a Great Hanshin-Awaji Earthquake Disaster Area  
- Through the Reconstruction Process : before, immediately after, and after 20 years of the Earthquake-

柄澤薫冬\*・窪田亜矢\*\*

Yukito KARASAWA\*, Aya KUBOTA\*\*

When the serious damage caused by the disaster, reconstruction forced at a position away from the original. However, it is moving to cut off the community. In this study, picking up the Wakamiya town in Ashiya city as a model case of reconstruction, we analyzed the reconstruction process and recognition after 20 years of the Great Hanshin-Awaji Earthquake. At Wakamiya town, despite being rated as a good space, space had changed before and after the earthquake and residents didn't feel good. But rather, at the followed process, they get a feeling of satisfaction.

*keywords:* The Great Hanshin-Awaji Earthquake Disaster, Blighted Residential Area Renewal Project, Wakamiya Area, Reconstruction Process  
阪神・淡路大震災, 住宅地区改良事業, 若宮地区, 復興プロセス

## 1.はじめに

### 1-1. 背景

災害により甚大な被害が発生すると、元とは離れた位置で復興せざるを得ない場合がある。一般的に被災者は元の場所・暮らしの復興を望むものの、災害の多い日本では、歴史的にみて都市居住の基本は災害に見舞われたら移動する「常ならざるすまい」であり、実際に阪神淡路大震災や東日本大震災においても、主体的に移動し、そのことにメリットを見出してきたと評価できる事例も存在する<sup>1)</sup>。

一方、再建の費用がなく遠隔地の公営住宅に入居するなど、主体的ではない移動を余儀なくされる人も数多く存在する<sup>1)</sup>。現に移動後を扱った研究は多く、移動が往々にしてコミュニティを寸断・人間関係の希薄化を招き、何らかの喪失感を抱くことが指摘されている<sup>2)</sup>。

結果的には、移動しなかった場合の評価の方が概して高い<sup>3)8)</sup>。しかし、その理由として「無意識的・偶発的な接触」<sup>8)</sup>環境の維持という空間特性が挙げられているものの、その要素は明確に定義されておらず、空間の論理だけではなく、人間関係や形成要因も合わせて考えることが重要となる。

### 1-2. 研究の目的と意義

予想されている首都圏直下型地震などの都市型災害における復興への示唆を与えることが必要である。

今回は、以下3点の理由から、阪神淡路大震災の事例を取り上げる。火災・建物倒壊による被害であること、都市型災害であること、そして20年経っていること、である。

(1) 元の地域での復興がそもそも可能かという問題がある。火災・建物倒壊による被害では、津波や土砂による被害のように「住めなくなる場所」が出てこないため、基本的には自身が住んでいたところで復興がなされる。

(2) 集落型災害では、血縁や農地など最低限解決すべき

事項がはっきりしている一方、都市には一般的に、代表的なコミュニティや生業がなく、復興の手がかりが少ない。そのため、首都圏直下型地震などを想定すると、都市型である阪神淡路大震災の事例が求められる。

(3) 20年経ち、復興まちづくりは日常のまちづくりへと昇華している。復興を主導してきた世代が交代して行くなか、現在まちづくりを積極的に行っている人々に、彼らの経験がどう引き継がれているか。取り組んできた復興を思い返し、評価してもらうことにより、いわゆる「災害ユートピア」<sup>3)</sup>としての満足ではない本質を探る。

以上を踏まえ、事例として、阪神淡路大震災において、「修復型改良事業」により多くの人が町内での再建を果たし、復興のモデルケースと名高い芦屋市の若宮地区、および地区全体を含む最小単位である若宮町を取り上げる<sup>4)</sup>。復興事業の範囲である若宮地区では、住民参加を基本としつつ、極力「普通のまち」をつくることを目指し<sup>5)</sup>た結果、「良い」復興であると評価されている<sup>6)</sup>。ここで、特に若宮地区では全半壊率約84%と甚大な被害<sup>6)</sup>を受けていることに注目したい。彼らの内の多くは仮住まいへの避難を余儀なくされたが、約6割の住民が地区内での再建を果たした<sup>7)</sup>。基本的な背景は他の地区と変わらない<sup>7)</sup>にも関わらず、若宮地区では多くの住民が帰還を果たしただけではなく、今でも評価が高いのはなぜか。本研究の目的として、主に現在まちに積極的に関わっている層への調査により、現在まで「良い」復興と評価されるためには何が重要であったか、いかにして復興まちづくりが日常のまちづくりへと繋がっていったか、そのプロセスを明らかにする。

若宮町における既往研究は、震災復興事業における若宮地区を扱ったものが2つある。安藤(2002)<sup>7)</sup>ではヒアリングおよびアンケートを行い、復興事業の評価を行って

\* 学生会員 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 (The University of Tokyo)

\*\* 正会員 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 (The University of Tokyo)

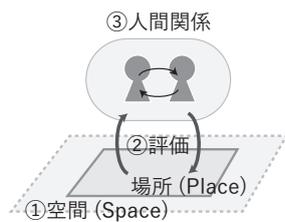
る。田中(2007)<sup>8)</sup>では地区内における移動実態を明らかにし、移動により孤立化する可能性が高かったが、無意識的・偶発的な接触を誘発する空間の維持・確立により防がれたとしている。しかし両者とも具体的にその要素の記述はなく、空間が確定的な説明要因であることを示せていない。よって人間関係や形成要因も含めた論証が必要となる。

### 1-3. 研究の視点と調査手法

事前復興の考え方がそうであるように、復興プロセスは災害が起きる前から始まっている。当時の住民が何を残そうとしていたか、守れたものはなにか、守れなかったものはなにか、今振り返って何が残っているか、それは被災前から続くものか、新しく作られたものか、を捉えることが重要である。その際特に若宮町の場合は事業計画案が住民協議により幾度と無く変更されたことを抑えておかなければならない。震災前にはあったが、最初に市から出された案にはなく、さらにその後の変更により再び現実となっているものについては、当時住民自身が大事にしようとしていたものであると判断できる。以上のことから、被災前、被災直後、20年後の現在の3時点に分けて考察を行う。

ここで若宮「町」などの「まち」を認識するにあたり、空間と場所の考え方をを用いる。イーファー・トゥアン(1988)<sup>9)</sup>は、ある空間にそれを介在する人間同士の経験が重なることで「場」が形成され、それが都市において重要であると主張する。つまり基本的には、空間・人間関係・それらの関係性の3つの要素により場=都市が構成される。よって、それら①物理的空間、②空間に対する評価、③人間関係、についての変遷を上記3時点に分けて整理する(図1-1)。

本研究では、これらの変遷を記述するため、2015年1月29日に、住民3名の方に3時間ヒアリングを行い、2



月1日に先の3名を含む住民12名の方に2時間ヒアリング兼地図ワークショップを行い、最後にアンケートに記入してもらうことを行った。参加者の属性一覧を表1-1に示す<sup>8)</sup>。

表1-1. ヒアリング参加者の属性

番号	現番地	性別	年齢	若宮町居住歴	家族構成	仕事	震災発生時の住まい	震災時の住宅への対応
1	5	男	71	71	夫婦	無職	持地・持家 一戸建て 昭和56～60年	元の場所建て替え・補修した
2	4	男	76	43	親と子	無職	持地・持家 一戸建て 昭和41～50年	一部損壊・一部倒壊 元の場所建て替え・補修した
3	5	男	64	64	親と子	自営業・自営業	持地・持家 一戸建て 昭和41～50年	物に被害なし 建て替え・補修の必要がなく、そのまま住み続けている
4	5	女	30	30	親と子と孫	自営業・自営業	持地・持家 一戸建て 昭和41～50年	物に被害なし そのまま住み続けている
5	6	男	78	56	親と子と孫	自営業・自営業	持地・持家 一戸建て 昭和41～50年	一部損壊・一部倒壊 震災では残ったが、その後の復興事業の関係で取り壊し、若宮町内で移転した
6	6	女	73	50	親と子と孫	自営業・自営業	持地・持家 一戸建て 昭和41～50年	物に被害なし 震災で取り壊し、若宮町内で移転した
7	6	女	65	42	親と子	家業専業	持地・持家 一戸建て 昭和30年	半壊・半壊 元の場所建て替え・補修した
8	7	女	71	50	自分だけ	家業専業	持地・持家 一戸建て 昭和41～50年	全壊・全壊 元の場所建て替え・補修した
9	7	女	71	35	夫婦	無職	持地・持家 一戸建て 昭和31～40年	全壊・全壊 震災では残ったが、その後の復興事業の関係で取り壊し、若宮町内で移転した
10	町外転居	男	76	20	自分だけ	その他	持地・持家 一戸建て 昭和30年	全壊・全壊 元の場所建て替え・補修した
11	9	男	72	72	夫婦と親	無職	持地・持家 一戸建て 昭和61～平成7年	半壊・半壊 元の場所建て替え・補修した
12	6	男	83	70	夫婦	無職	借地・持家 一戸建て 昭和31～40年	半壊・半壊 元の場所建て替え・補修した

列ごとの塗りつぶし項目の凡例

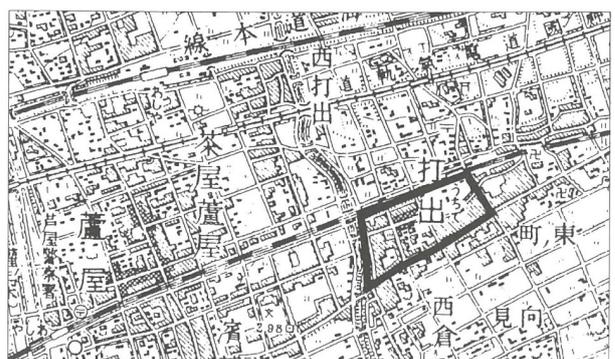
- [番号列] 2015.01/29ヒアリングにも参加(3/12)
- [現番地列] 住宅地区改良事業の対象範囲内(8/12)
- [年齢・若宮町居住歴列] 生まれた時から若宮町に居住(4/12)
- [震災発生時の住まい列] 半壊以上(6/12)
- [震災時の住宅への対応列] 震災では残ったが、その後の復興事業の関係で取り壊し、若宮町内で移転した(3/12)

## 2. 物理的空間の変遷

### 2-1. 被災前

若宮町は、芦屋市のほぼ中央部、阪神電鉄と国道43号線に挟まれた約4.2haの区域である。明治18年の市街地図(図2-1)を見ると、ヒアリングの「明治の初めでも打出村で300戸ないくらい」<sup>9)</sup>との言葉通り、西国街道の他は目立った繁栄は見られない。その後明治22年の町村制の施行で精道村が誕生。明治38年に阪神電車が開通し、打出停留所が設置されたことと、大正年間の精道村耕地整理事業により、大阪のベッドタウンとしての市街地化が進みだした。また、昭和7年の市街地図(図2-2)を見ると、「打出村の南北のメインの通りだった打出一番通り」<sup>9)</sup>が若宮地区(若宮町の西半分)の真ん中に整備され、周辺に比べて両側の建築密度が高く、賑わいの中心となっていることが見て取れる。この建築密度の差が、後に東西の被災度の違いを分けることとなる。昭和38年に地区の南で国道43号線が拡幅され、昭和45年には阪神高速が併用を開始したこともあり、この南北の動線の意味合いは次第に薄くなり、商業はターミナル駅や打出商店街へとシフトしていき、一番通り周辺は一般的な住宅街へと姿を変えていった。

震災直前は住宅を中心としながら商業・業務施設が多少存在する土地利用であった。一戸建てが約6割、文化住宅・アパートが約3割、非木造のマンションはわずか2%であった。特に、若宮地区においては、全住宅戸数261戸のうち、長屋等の連続建てや文化住宅・アパートの木造賃貸住宅が105戸(40%)、接道不適格住宅が113戸(43%)、戦前に建った住宅が94戸(36%)と多く、老朽化した木造密集市街地となっていた<sup>6)</sup>。



## 2-2. 被災直後

被害状況は、全壊が171戸(43%)、半壊が89戸(22%)、一部損壊が123戸(31%)で、町内の死者は8人であった。若宮地区(図2-3:Aブロック)においては、全壊151戸(58%)、半壊68戸(26%)、計約84%という甚大な被害であった<sup>6)</sup>。一方の東側半分(図2-3:Bブロック)においては、全壊20戸(14.3%)、半壊21戸(15.0%)、計約29%と、軽微な被害ですんでいる。

## 2-3. 計画:Aブロックについて

被災後の計画の変遷について記述する。震災直後の1995年3月と7月の2度、市は全面建て替え型の事業計画案を提案する。しかしいづれも、全壊を免れた戸建持家の居住者の多くが全面建て替え型の計画(図2-5)を受け入れなかった<sup>7)</sup>ことや、あまりにもすぐ出てきたことに対する不信心<sup>10)</sup>から、市は方針転換を余儀なくされ、住民参加で復興まちづくりが行われることとなった。この後計6回計画変更され、1996年6月に最終の事業計画案(図2-6)が発表された。これを受け2000年10月までに市営住宅が全部で6棟、計92戸建設された。一方Aブロック内の戸建住宅の再建(被害のないものも含む)は65戸であり、市営住宅と合わせて157戸と、従前よりも100戸ほど減少している。これにより、被災前は約500m<sup>2</sup>しかなかった公園面積が、広場、



図2-3.若宮町の被災状況図(平成7年1月)<sup>6)</sup>



図2-4.2014年の若宮町地図(震災前との比較)

緑地合わせて約1900m<sup>2</sup>の面積を確保するに至っている。

細かい計画内容を見ると、被災前の空間そのものを一部、要素として凍結的に保存している面もある。南東街区の路地を1本、南西街区の若宮緑地のせんだんの木の大きさを、西側真ん中に地蔵尊を残している。また、市営住宅については4階建て以下を基本とし、北側への影響のない線路側の1号棟のみが5階建てとなっている。

## 2-4. 現在

戸建住宅再建の動きの現在への影響を見る。震災前と2014年における住民の変化を、ゼンリン住宅地図記載世帯の苗字を元に比較した(図2-4)。震災を受けても建て替えを行い現在まで住んでいる戸建住宅は合計24軒あり、

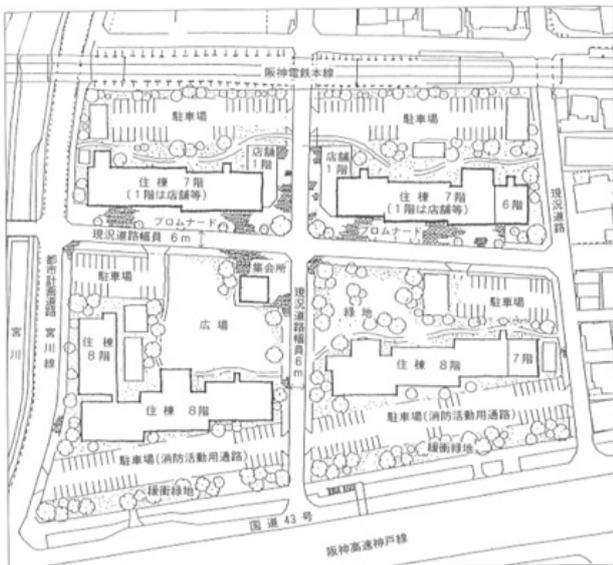


図2-5.検討図面(平成7年5月)<sup>6)</sup>



図2-6.震災復興住環境整備事業全体整備図<sup>6)</sup>

そのうちの9軒(37.5%)の敷地が動いていた。1軒ではあるが、AからBへとブロックを動いた例も存在する。

事業完了から約14年経つ現在までにおいて、大規模な空間再編は行われていない。地図には表れていないが、ヒアリングによるとBブロックにおいて、打出商店街のアーケードが1992年につけかえられている。復興事業によりAブロックの市街地が綺麗になったことを受け、「ちょっとかっこ悪いな、と。それで商店街も綺麗にせないかんとって、リニューアルに踏み切った」<sup>(11)</sup>と述べていた。

## 2-5. 小結

市営住宅を含んだ再建を行うにあたり、「若宮らしい」「普通」のまちを目指し、設計者も「もともとのまちにあった一番大きな家くらいの単位よりも大きなものはつくりたくない」<sup>(11)</sup>方針のもと、従前の2,3階が主であった市街地と「馴染む」<sup>(11)</sup>ように、分節・セットバックした上で4階までの高さとするを基本としている。つまり、設計は「馴染む」ように為されているのであり、従前の市街地の文脈を「維持」しようとする意図はなかった。むしろ実は、Aブロックの市街地の物理的環境は大きく変わっている。被災前は長屋建てがメインの木造密集であったが、現在では、雰囲気と調和する新しい市街地へと変革を遂げている。

一方で、Bブロックの物理的環境は、被災前から現在に至るまで変わっていない。

## 3. 空間に対する評価の変遷

### 3-0. 調査手法：地図ワークショップ

3章では特に地図ワークショップ(以降、地図WS)の結果を比較する。内容は、1965年、1995年(被災直前の地図に倒壊状況の記載がしてあるもの)、2013年のゼンリン住宅地図を用い、(a)昔あって、被災によりなくなった要素、(b)昔あって、被災によりなくならなかった要素=今あって、被災前からある要素=昔から今までずっと継続している要素、(c)今あって、被災を契機にできた要素、の3要素について、それぞれ「良い」「悪い」の評価を加えた上でそれぞれ1965年の地図に(a)を、95年に(b)を、13年に(c)をプロットしてもらった(表3-1, 図3-2)。

### 3-1. 被災前

震災前の若宮町が当時どう思われていたか、地図WSおよび安藤(2002)<sup>7)</sup>のアンケート結果から分析を行う。

安藤(2002)<sup>7)</sup>では、Aブロック居住者に、従前の住環境の問題点8項目と道路の問題点9項目を聞いている。住環境について、住民のほとんどが従前の住環境に問題点があったと回答し、その中でも「住宅が密集していた」(78%)「住宅が老朽化していた」(64%)「道路が狭かった」(63%)「緑が少なかった」(50%)「公園や広場が不足していた」(47%)が高くでている。道路に関してほとんどが問題があったと回答するが、数字の高い項目は「緊急車両が入れなかった」(52%)「駐車場を外で借りる」(43%)のみとなっている。

地図WSにおいても、「道が狭い」「車が止められない」

「迷路みたい」「緊急車両が入れない」という声が多々挙がった(表3-1(a,b))。Aブロックへの意見が多いものの、Bブロックについても入り組んでいる道路があることが指摘されており、若宮町全体としても良い住環境とは評価されていなかった。一方、ヒアリングにて良かったところをたずねると、ほぼ全ての人が「路地」と答え、子どもの頃から住んでいる人は「昔は一帯が丘になっていて泥だらけになって遊んだ」「悪い遊びができた」「今は窮屈」などと答えた。住環境に問題点はあっても、楽しく愛着を持っていたことが伺える。

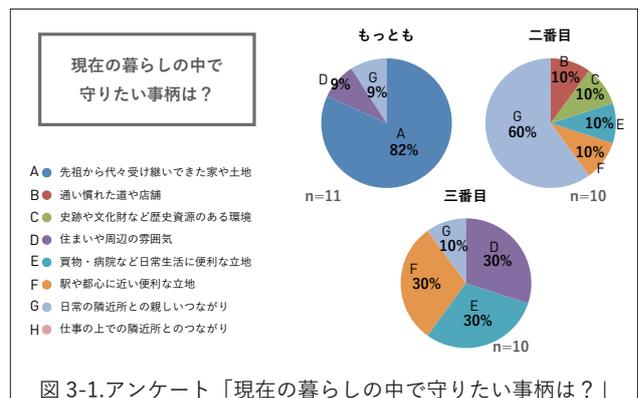
### 3-2. 被災直後：計画において

計画により生み出された空間に対する評価を見る。表3-1(c)を見ると、被災を契機にできた要素のうち「良い」と評されているものは33個ある。内訳は「公園・緑地・広場」17個、「集会所」5個、「市営住宅」4個、「街並み・道路幅・見通し」4個となっている。その他、地蔵がまちの入口としての役割を果たしていることや、せんだんの木を見て子どもが遊びに来ること、市営住宅1号棟と2号棟の間が路地のような良い雰囲気を残していることが良い面として捉えられている。特に「公園・緑地・広場」は、12人中8人が良い要素として挙げており、若宮の空間形成に大きく寄与していると考えられる。ただし、各々が小さく細切れで存在し管理が大変だ、という意見も2人から挙がった。

### 3-3. 現在

今の良さを問う(表3-1(b,c))と、「打出駅に近い」「便利」「六甲山が見える」「小学生」「狭い」「地蔵尊」「広場・公園・緑地」といった声が挙がる。それを踏まえ、現在の暮らしの中で守りたい事柄1番目～3番目を、アンケート選択式にて聞いた(図3-1)。

最も守りたい事柄において、「先祖から受け継いできた」家や土地が圧倒的に選択されている。一方、今の「良い」空間は昔からあったものではない。3-1で述べたように、ほとんどの住民が以前の住環境に問題点があったと回答している。このことから、問題点があったとしても、住みづらくはなく「良い」場所であったといえる。更に、先の回答をした9人のうち4人は自分の代で引っ越してきた人であり、同3人は震災による影響は受けなかったものの、その後の復興事業により土地の移転を余儀なくされた人である(表1-1)。つまり、自身の土地に対して「先祖から



受け継いできた」と評価できる感覚を持つためには、実際に物理的に全く同じ土地である必要はなく、その感覚を持つに至らした周辺環境が重要であることが示唆される。

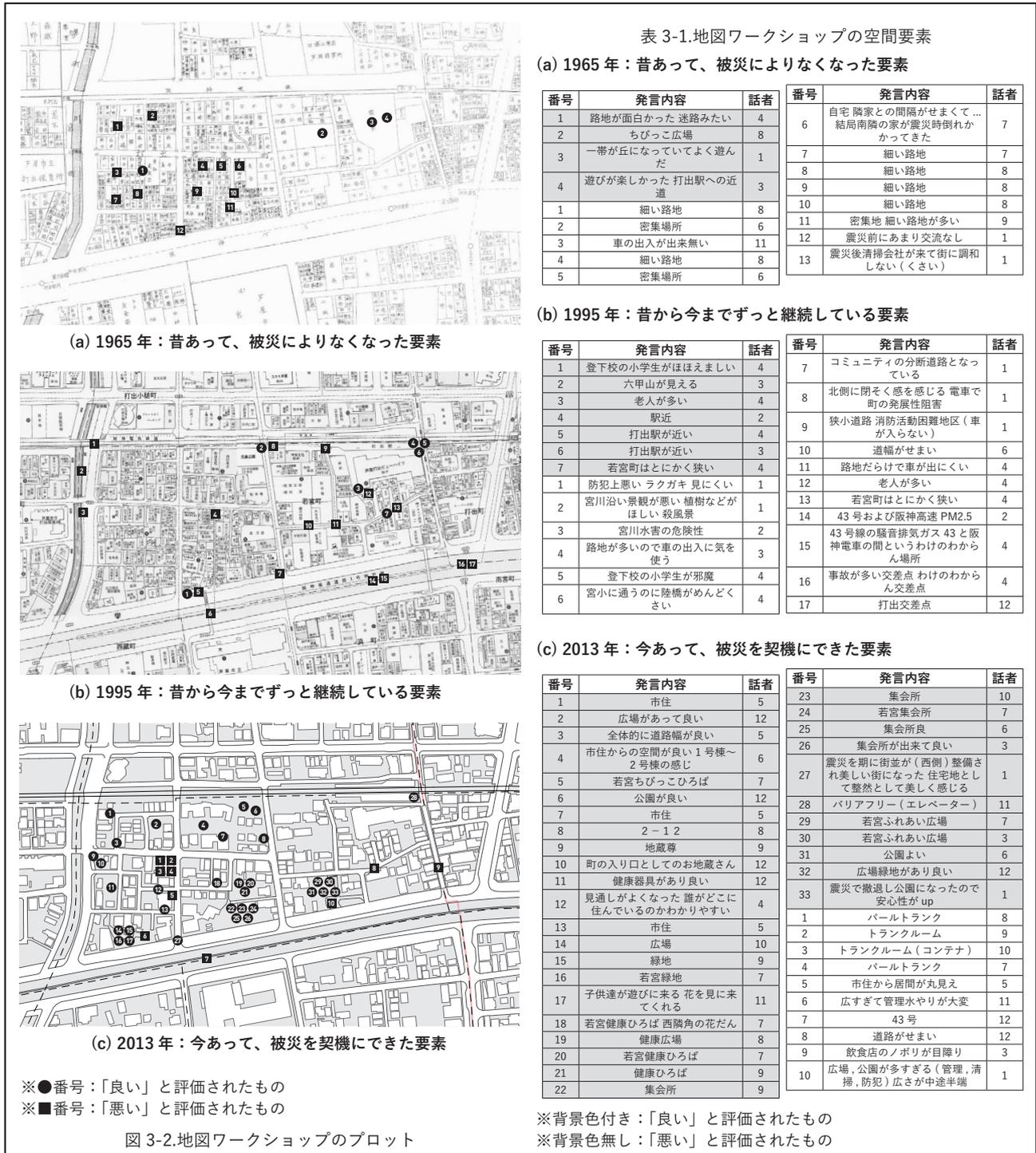
ただ、なぜ残ったかをヒアリングすると、「便利」という答えが多く聞かれた。「病院・買い物、どこへも1分」<sup>(12)</sup>「神戸にも大阪にもでやすい」<sup>(14)</sup>といった具体的な話も挙がる。「愛着」ではなく、多少今までのような住みづらさが残ったとしても、現状よりも便利度が上がるところに安く移れると現実的に思っていなかった可能性も考えられる。

次に、ブロック別の考察を行う。Aブロックについては、

「美しい」という言葉をもって捉えられている。その一方で逆にBブロックの住民からは、「震災後はこっちのほうが古くなってしまった」<sup>(11)</sup>「次は我々やない意識がぬけない」<sup>(9)</sup>という意見が挙がる。阪神・淡路大震災ではBブロックの建物被害は少なかったため、空間としては震災前と今とで変化はない。しかし、20年経て老朽化している現状を受け、次に別の震災が起きた際にはBブロックの被害が大きくなるだろうとの危機感を抱いている。

### 3-4. 小結

若宮町全体として住環境は悪いものの、根底としての土



地への想い<sup>(15)</sup>が震災前から流れていることが伺えた。

また、ブロックを分けて捉えると、Aブロックは震災を経てまちへの評価が上がっている。その一方、Bブロックではまちへの評価が相対的に下がったと言える。

#### 4. コミュニティにみる人間関係の変遷

##### 4-1. 被災前

「向こう3軒両隣」の親しい繋がりのある人はいるものの、まちとしての自治会活動はあまり機能していなかった<sup>(16)</sup>。ヒアリングによると、近年では小学校の登校班もブロックで分かれており<sup>(17)</sup>、子どもを通して近所づきあいをする母親層も若宮町内で2つに分かれてしまっていた。逆に男性は、震災前は働いていて、朝早くに出て夜遅くに帰ってくるため、ほとんどコミュニティと呼べるものはなかったという声が多数挙がった<sup>(9)(10)</sup>。

##### 4-2. 被災直後

Aブロックでは、被災から復興に至るまで、2段階のコミュニティ形成がなされた。被災直後、避難所で共同生活をするようになり、はじめて近所の人との会話が生まれた例も多い<sup>(14)</sup>。その後市から出された全面建て替え型の計画に反対するためにまちづくり協議会が設立され、住民自らの意見により復興が為されていく。震災がなければ知り合わなかったとの意見もみられた<sup>(18)</sup>。この過程において、少なくとも誰がこのまちに住んでいるのかを把握するようになった。また、まちづくり協議会においては、住民意見の偏りをなくすため、できるだけ多様な背景を持つ人を役員として迎え入れたと述べている。これにより、既存の人間関係を越えた繋がりが形成されるきっかけとなった。

##### 4-3. 現在

ブロック別の人間関係に注目したい。震災直後の3月26日に行われた第1回のまちづくり懇談会の会議では、Bブロックの住民も役員として参加しているが、事業区域が決定されるとAブロックの住民のみの参加となる。この頃はむしろ、Aブロックの住民にとっては、なぜ同じ若宮町のなかで自分の範囲だけが全面建て替えとなるのか、「乱暴な話」<sup>(10)</sup>だと思ったという話もされている。その後目処が立つと、Bブロックの住民もまちづくり協議会に参加するようになり、若宮町一体となって良好な環境を維持しようとする動きも生まれ、若宮地区まちづくり協議会は、若宮町まちづくり協議会へと昇華し、2005年に若宮町全体を対象とする地区計画の制定に至る<sup>(10)</sup>。ヒアリングからは、西側と東側が一体化し、コミュニティが活性化したことに対し、多くの人から満足しているとの声が挙がった。これを受け近年では、「若宮クラブ」という「若宮」を冠した自治会・まちづくり協議会・老人会等を統合する総合型の自治組織が萌芽し、積極的に介護や子どもイベント等が行われており<sup>(9)</sup>、まちへの帰属意識の高まりが見られる。

##### 4-4. 小結

震災前は両ブロックともに近所づきあい以上のコミュニティはなかったが、その後震災を受け、より広いコミュニ

ティが醸成されていく過程が明らかになった。はじめにAブロックのまちづくり協議会において活発な議論が行われ、住民主導によるまちが出来上がる。その後10年を経て、まちづくりはBブロックも含め、若宮町全体としての地区計画まで辿り着く。これにより、少なくともAブロックを主導してきた住民層とBブロックの住民の一部が若宮町としての一体感・帰属意識を得ることとなった。

#### 5. 復興プロセスが現在までの評価にどう影響したか？

##### 5-1. 復興事業後から現在までの満足度の変遷

安藤(2002)<sup>(7)</sup>の、当初の全域集合住宅からなる改造型計画案、変更後の修復型計画案、事業実施の結果への評価の分析(図5-1)によると、「良いと思った」は12.4%とかなり低い一方、「まあ良いと思った」は50%にものぼる。その上、存置住宅では「良いと思った」は5.6%、「まあ良いと思った」は40.7%と更に減る。これらを踏まえると、塩崎(2007)<sup>(3)</sup>が言うところの「やむなく元の場所を離れた人が喪失感を抱いたまま現状に従わざるを得ない状況を固定化している」様子が見て取れる<sup>(13)</sup>。つまり、復興事業完了直後、地区住民はそれぞれに妥協点を見出し、「まあ良い」と認識しているものの、手放しに満足していたとは言い難い。この状況を「形式上の満足」と呼ぶこととする。

その後約15年が経過した。アンケートにて、「20年経ち振り返ると、若宮町に戻って復興してよかったか」を聞くと、「大変満足」5人、「やや満足」5人、未回答2人となった。Aブロックはそのうち、それぞれ4人、2人、2人であり、限定的な対象ではあるものの、存置住宅の「良い」が5.6%であった15年前と比べ、明らかに良いと評価する人が増え、満足していると言える。また、ヒアリングにて、「若宮は環境が良くて、外から市営住宅に入りたいって言う人が多いよ」<sup>(14)</sup>と述べており、市営住宅ができ外部からの人気でたことが住民の満足につながって

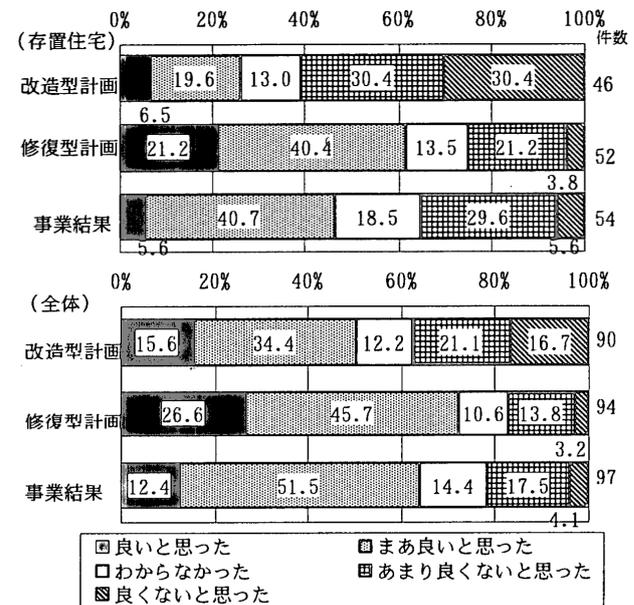


図5-1.各段階での計画、事業結果の評価<sup>(7)</sup>

いる可能性もある。実際に平成 25,26 年度の市営住宅入居申込の団地別希望者数(表 5-1)を見ると、若宮町住宅を希望する人はその戸数に比べて多くなっている。15 年を経て「形式上の満足」がいかにして「満足」に変わったのか、またその「満足」とは何か考察し、結論とする。

### 5-2. 形式上の満足から真の満足へ

図 3-1 に示されているアンケート結果をもう一度参照する。現在まちづくりに積極的な層において、最も守りたい事柄に、「先祖から受け継いできた家や土地」が圧倒的に選択され、2 番目も、「日常の隣近所との親しいつながり」が大勢を占める。3 番目になると評価が別れるため、「先祖から受け継いできた家や土地」と「日常の隣近所との親しいつながり」が、彼らが守りたい事柄であると言える。現状に満足している今、彼らが共通してこれらを守りたいと言っているということは、これらが担保されている状態こそが「真の満足」であると言える。ここで震災前をみると、コミュニティとしての親しいつながりはなく、A ブロックについては震災前後で全く違う空間になり、家や土地自体が復興事業により移転している人もいたことから、これらの事柄は、震災後から現在までの間に醸成されたと言える。「真の満足」は自ら獲得したものなのだ。つまり、復興事業完了後から現在までの間に起きた変化を追うと、それらを醸成せしめた要因がわかる。2,3,4 章を踏まえると、これらの変化は、空間とその評価の変容(2-5,3-3)とコミュニティの醸成(4-4)として記述できる(表 5-2)。

#### (1) 空間とその評価の変容: 「形式上の満足」とは何か

表 5-1.市営住宅申込希望者数

団地名	H25	H26	戸数
南戸屋浜団地	29	18	400
上宮川町住宅	4	11	217
宮塚町 2 番住宅	4	4	20
<b>若宮町住宅</b>	<b>12</b>	<b>14</b>	<b>92</b>
柳町住宅	7	8	42
翠ヶ丘 23 番住宅	1	2	45
大東町 4・5・11 番住宅	2	3	81
大東町 14・15・16・17 番住宅	4	5	268

参考文献 12) より筆者作成

3 章でみるように、現在住民にとっては「公園・緑地・広場」などの快適な住環境と、「六甲山」「路地」「地蔵尊」「せんだんの木」などの「従前

の若宮らしさを残していると感じさせる要素」<sup>(19)</sup> が重要となっていることが示されている。しかし、被災直後の段階においては、被災状況も各人それぞれ違い、皆復興そのものに精一杯であるため、それら「基礎となる住環境」「誇れる要素」を言語化することができず、「喪失感を抱きつつも、なんとなく良い」という個人がそれぞれに抱く「形式上の満足」に過ぎない状態となっていた。

#### (2) コミュニティの醸成

事業完了後において、復興で手に入れた美しい街並みは、A ブロックの住民の誇りとなっていった。一方、B ブロックへの評価は相対的に下がり、B ブロックではまちづくりを積極的に行おうという機運が生じた。「便利」さが根底にある若宮町の中で、A ブロックにとつての「魅力的なコミュニティのあるまち」の維持と、B ブロックにとつての「安全・安心」の維持・形成<sup>(20)</sup> という両者の思いが重なり、「若宮町」としての一体感が生み出されていった。つまり、お互いが個人でバラバラに持っていた思いを共有し、集団によってそれらを認識することにより、まちという「場所」として守るべき価値が生じた。真の満足感、集団の中で培われるこうした「そのまちらしさ」とでも言うべき帰属意識の獲得により醸成されたのである。

### 5-3. 結論: 2 段階の帰属意識醸成の重要性

以上をまとめる。復興プロセスの中でまちづくりに積極的な層が形成され、彼らが自らまちを認識していく過程で、「形式上の満足」「真の満足」という 2 つの段階それぞれにおける帰属意識の醸成が復興プロセスにおいて重要であることが示された。復興事業で少なくとも基礎となる住環境と誇れる要素を形成したこと(「形式上の満足」の獲得)、その後のまちづくりの機運の高まりにより、復興まちづくりに関わっていない人も含んだ「現在まちづくりに積極的な層」が形成され、彼らの中で復興プロセスで培ってきた「形式上の満足」が共有されることでまち全体に一体感が広がり、「そのまちらしさ」を獲得出来たこと(「真の満足」

表 5-2.復興プロセスにおける認識の変化

ブロック		被災前	被災直後	変化	今	
空間	① そのもの (物理的空間)	A	木造密集市街地	大きな被害を受ける (一時的な移動を余儀なくされる)	変わった (住環境整備事業、従前の文脈との「調和」)	再建・低密化 (市営住宅建設 100 戸ほどの減少、路地・せんだんの木・地蔵尊の保存、公園・緑地・広場の設置)
		B	木造低密市街地	軽微な被害 (一時的な移動も少なかった)	不変	老朽化 商店街アーケード改修
	② 評価 (空間に対する評価)	A	住環境に問題あり (密集、老朽化、狭い、など) 遊びが今より楽しかった (路地)	良くなった (公園、集会所、市営住宅など) 公園の管理が大変	「良い」へ変化 (「美しい」)	良い (美しい、安全、安心)
		B	住環境に若干問題あり (密集、老朽化、狭い、など) 遊びが今より楽しかった (路地、丘で泥だらけで遊んだ)	不変 (公園が若干増え、管理が大変)	「悪い」へ変化 (相対的に危機感)	悪化 (震災後はこちらの方が古くなった、かつこ悪いから負けないように)
③ 人間関係	A	コミュニティはない	住民主導のまちづくり (個人としての形式上の満足)	変わった (コミュニティ醸成)	若宮地区のまちづくりを町全体へ発展させる (魅力的なコミュニティのあるまちの維持)	
	B	コミュニティはない	コミュニティはない (東側の西側への憧れ)	変わった (コミュニティ醸成)	若宮町全体でまちづくりを行う (安全・安心の形成)	
	A と B の関係	コミュニティはない	コミュニティはない	変わった (コミュニティ醸成)	住民主導のまちづくり (若宮町全体での満足) 西と東が一体となって良い	
満足度		土地への思い (住環境に問題があっても、昔はよかった、便利)	喪失感を抱いたまま 状況を固定化 (便利)	変わった (一度満足が低くなるも、現在は回復 ただし、ずっと便利)	守りたいもの 先祖から受け継いできた家や土地 日常の隣近所との親しいつながり (愛着、便利)	

※○数字は 1-3 節の①~③と対応

1 段階目 「形式上の満足」 → 空間に対する評価の変容 コミュニティの醸成 → 2 段階目 「真の満足」

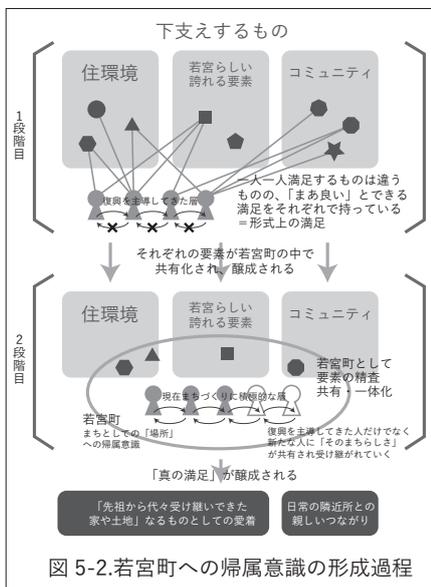


図 5-2. 若宮町への帰属意識の形成過程

へと深化)、この両者により「良い」復興という評価を得、復興まちづくりが現在の日常のまちづくりへと繋がった(図5-2)。そのきっかけは若宮では、AブロックとBブロックとでまちの認識が良い意味でズレていたことであった。実は空間に震災以前の面影を残しておらず、コミュニティと呼べるものもなかった若宮ですら「良い」復興となり得たことから、一般的に、復興プロセスにて、空間だけでなく「そのまちらしさを考えるきっかけ」を生み出すことが復興まちづくりに極めて重要である可能性が示唆された。

本研究では若宮町の限定的な復興プロセスを追っているが、ひとつの町内で被災状況に違いがあり、木造密集かつ交通利便性が高いという、大都市中心〜フリンジ部に典型的に見られる町の復興プロセスの一つの可能性を示した。今後の課題として、引き続き他の対象・地区での検討も行い、精査したい。

#### 【補注】

- (1) どの災害においても実態の大まかな把握ですら困難であるが、参考文献2)では、阪神淡路大震災における県外被災者の数を54,700人と推定し、被災から14年経つ2010年でも116人の県外被災者が戻りたいと望んでいる状況を述べている。また、兵庫県の連絡制度「ひょうごガムバックコール&メール事業」に登録が始まった2000年7月から2009年3月までの期間に登録を終了した県外被災者は856人、そのうち県内に戻ってきた人が251人であり、実に7割の人が戻ってきていないという計算をしている。戻ってきていない人605人の内訳は、「永住を決意」(306人)、「県営住宅を断念」(60人)、「死亡」(12人)、「消息不明」(227人)である。
- (2) 塩崎(2007)<sup>3)</sup>は、やむなく元の場所を離れた人が喪失感を抱いたまま現状に従わざるを得ない状況を固定化している現状を指摘し、田中(2012)<sup>4)</sup>は、移動した先での孤立化の進行を指摘している。
- (3) 参考文献5)において、生活再建過程は被災後10,100,1000時間で区切られた4つのフェーズに分けられ、最後「現実への帰還」のひとつ前のフェーズIIIが「災害ユートピア:ブルーシートの世界」とされ、一種の原始共産的な暮らしが育まれる期間とされる。若宮地区においては住民参加により皆で議論しながらまちづくりを行ってきた。更に、その活動は2005年に若宮町全体の地区計画が制定されるまで続く。これらの皆で努力しようとしている期間は先の「ユートピア」的思想に陥りやすく、冷静な判断を欠くおそれがある。そのため、そこから更に10年経た今再び評価を問うことにより、初めて冷静な評価を得ることができると考える。
- (4) 復興事業の範囲は「若宮地区」と呼ばれる若宮町の西半分(図2-3にてAブロックと記載のある部分:以降「Aブロック」とも表記する)であるが、自治会などの住民組織の最小単位は若宮町であるため、若宮地区だけでなく、若宮町として一体的に捉える必要がある。以降、若宮地区(Aブロック)と記載するときは復興事業の範囲のみを、若宮町と記載するときは町全体を指すものとする。(また、残りの東半分は「Bブロック」と表記する。)
- (5) 参考文献6) p.56 コンサルタント後藤祐介自らの記述文章による。
- (6) 若宮地区における住環境整備事業、および設計者江川直樹らの研究発表は、第3回兵庫県人間サイズのまちづくり賞(2002)、第4回関西まちづくり賞(2002)、第1回地域住宅計画賞(2006)、2006年度都市住宅学会賞(2006)など数多くの賞を受賞している。
- (7) 阪神間の被害の大きい地区は、震災復興緊急整備条例の重点区域に指定されている。それらは基本的に、戦災復興で基盤整備がなされていない元々の旧村落の中心部であり、利便性の高い木造密集市街地という文脈を共有していた。その中で比較しても若宮地区は特に震災以前からの住民が戻り、評価も高くなっている。
- (8) 今回のヒアリング参加者は、現若宮町自治会長の声掛けによる12名のため、現在まちづくりにある程度積極的な層に限定され、その他の表に出てこない層のサンプルが少ないことは今後の大きな課題である。ここで、参考文献6)の復興事業完了間際の住民座談会の議事録を見ると、当時の座談会に参加した住民9名のうち、過半数の5名が今回参加し、協議会元会長も含むことから、復興

まちづくりに積極的に関わってきた層の主たる意見はこの人数でも十分伺えている。同時に彼らは現在のまちづくりに積極的な層に含まれる上、復興段階ではまちづくりに参加していなかった人も現自治会長・副会長含め4名参加しているため、現在の日常のまちづくりに積極的な層についても十分代表性があると言える。

- (9) ヒアリング:住民1の発言による。
- (10) ヒアリング:住民10(協議会元会長)の発言による。
- (11) ヒアリング:住民3の発言による。
- (12) ヒアリング:住民6の発言による。
- (13) 従前多くを占めた借家層は特に条件もなく市営住宅に入る権利があり、比較的失うものが少なかったのに対し、存置住宅の人が市営住宅に入るためには、土地を市に売る必要があった。図3-1に見るように自らの土地を手放したくない人=存置住宅を選んだ人にとっては、市営住宅に入ることはできず、また2-4で述べたように、そもそも事業により土地の移動を迫られた例が9件も存在し、市営住宅入居者に比べて満足度がより低くなったと言える。
- (14) ヒアリング:住民9の発言による。
- (15) 先述の通り、震災が起きても自らの土地を離れなかった理由が、まちに愛着を持っていたからなのか、単純に利便性の良い土地を離したくなかったからなのかは分からない。よって、この章の結論で「想い」という表現に留め、愛着の話はしないこととする。
- (16) 参考文献6) p.42 当時自治会長の発言による。「コミュニティ」という大きい単位ではなく、ごく近所の人と強い仲を形成している。
- (17) ヒアリング:住民4の発言による。
- (18) ヒアリングによると、「震災があったから人とつながれた」「震災は本当に不幸なことだったが、人と繋がれたことが財産となっている」という話が出ている。
- (19) 基礎としての「公園・緑地・広場」などの快適な住環境の他に、住民が自ら若宮の良い要素であると認識している「六甲山」「路地」「地蔵尊」「せんだんの木」について、これらは、始めはコンサルタントが住民の代わりに発見したものかも知れないが、住民自身にとってこれらが誇れる要素となり、集団において言語化し共有できることが重要であり、その発見の過程は関係ないとする。
- (20) 2005年に策定された若宮町地区地区計画の基本目標は「安全・安心・便利で魅力的なコミュニティのあるまち」としての良好な市街地の維持、形成である。

#### 【参考文献】

- 1) 牧紀男.(2011), 災害の住宅誌 人々の移動とすまい, 鹿島出版会, pp.10-25
- 2) 田並尚恵.(2010), 阪神・淡路大震災の県外被災者の今:震災から15年, 災害復興研究, (2), 143-159
- 3) 塩崎賢明, 田中正人, 目黒悦子, & 堀田祐三子.(2007). 災害復興公営住宅入居世帯における居住空間特性の変化と社会的「孤立化」: 阪神・淡路大震災の事例を通して. 日本建築学会計画系論文集, (611), 109-116.
- 4) 田中正人.(2012). 災害復興過程における居住者の移動実態とその背景. 神戸山手大学紀要, (14), 109-127.
- 5) 木村玲玖, 林春男, 立木茂雄, & 田村圭子.(2004). 被災者の主観的時間評価からみた生活再建過程: 復興カレンダーの構築. 地域安全学会論文集, (6), 241-250.
- 6) 芦屋市/若宮地区まちづくり協議会.(2002). 若宮 震災復興まちづくりのあゆみ ー若宮地区震災復興住環境整備事業の記録ー, 芦屋市, pp.1-64
- 7) 安藤元夫, & 幸田稔.(2002). 芦屋市若宮地区における震災復興修復型改良事業の居住者による評価に関する研究. 日本建築学会計画系論文集, (553), 217-224.
- 8) 田中正人, 塩崎賢明, & 堀田祐三子.(2007). 被災市街地における住宅・市街地特性の変化と近隣関係の継承に関する研究: 芦屋市若宮地区の事例を通して. 神戸大学大学院自然科学研究科紀要. B, 25, 139-148.
- 9) イーファー・トゥアン.(1988), 空間の経験 身体から都市へ, 筑摩書房, pp.1-352
- 10) 若宮町まちづくり協議会/芦屋市.(2005), 若宮町まちづくりルール「地区計画」と「まちづくり憲章」, パンフレット pp.1-4.
- 11) 檜谷美恵子.(2006), 第18回 すまい・まちづくりフォーラム関西21, NPO西山記念文庫 すまい・まちづくり文庫レター No.33, pp.6-13.
- 12) 芦屋市.(2014), 市営住宅入居者選考委員会-会議録(資料), p.4